春色傳家の花 四

ヘ 13
2926
4

金毛傳家の花編序

むかしむかしの稚浮ふ猿蟹といへるものあり

猿が持てる柿の実をしい蟹の拾ひて握飯と

取かへしともいふ來歴のしよかなれば

さる春の頃に萬と衣まで赤い本を柿見

実にいはれなども傳ぶれの窓の福

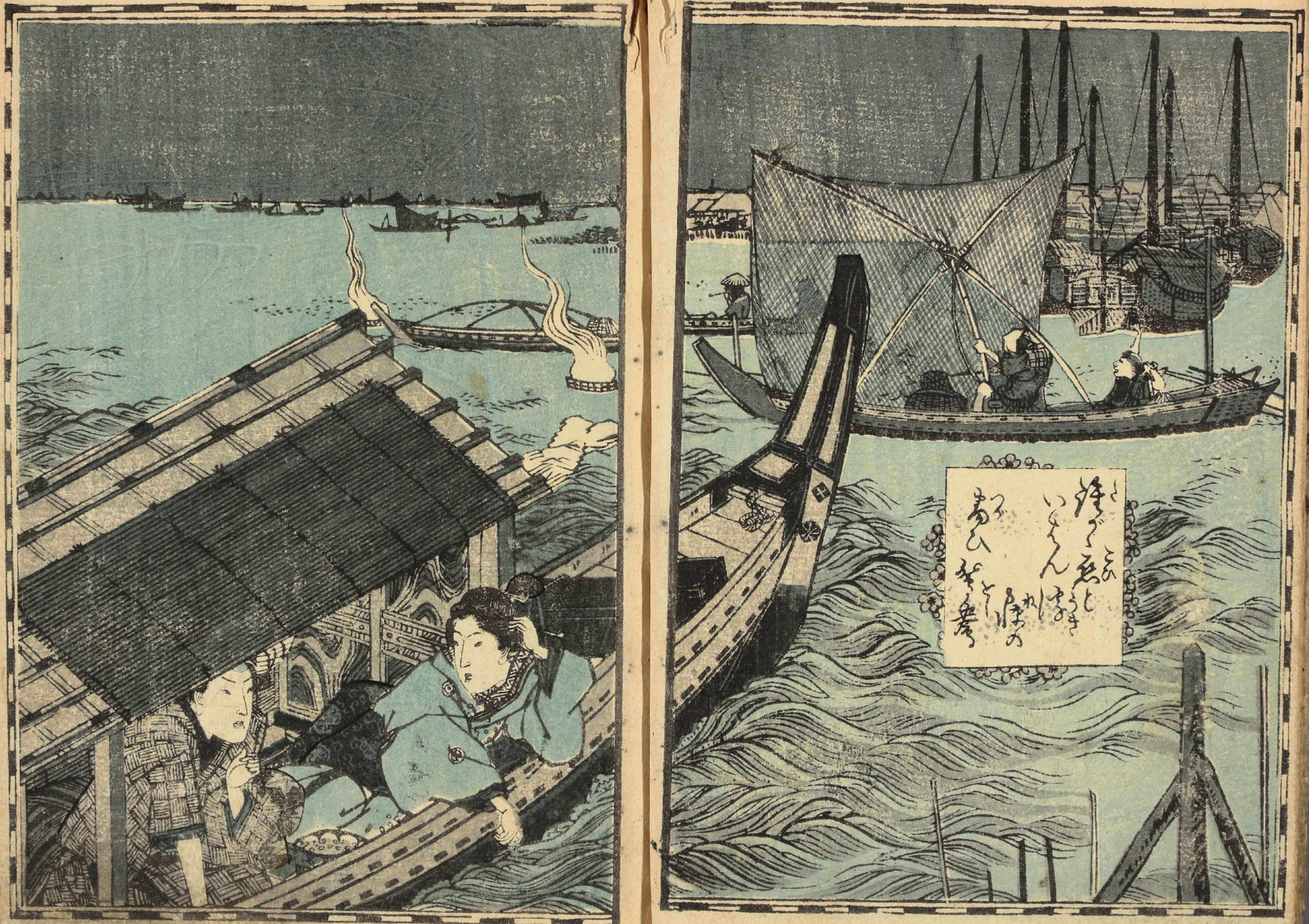
へ 13
2926
4

昭和九年七月六日

結縁あるは娵嫁取の蒲筵に称し
極らん宣に存し初高よりて撰まし
手妙壽つの丹津ふ柳しめかに五粉ふ
より野ふ信てを深く花をたし粉れ
現さしく文水堂大運の傳家花の
一株目の稚満が蔵し様よう擇まあが

福あまりてと鳥のはらぐろき鴉魔にあけ
れを今四編まで伸よれど三下さらぬ猿
の毛に細き三の筆の操を人似ぐら
志く手出して先序文とうちりかく
さるよ志の程

東都狂川叟
為永春水誌



春色傳家の花 巻之十

江戸 為永春水著

第十九回

什麼く小万が身の上をくハしく尋ぬる小町八間ど議会の内の和談下ふ達かされバ場末なれども賑ずうかぬ新獲手増も あべく何でも撰取緑町ふ最もお中き新名あり宝中種ふちやらちう土格子造りの二室へ金八柳ど何と中ら鳥時分帰をの造

作なく主ハ年頃四十四五盛りハ余程過たれど
若い粧装が好なるに標致も人に勝れて中にも見柳ハ
三十七八か未だ四十にハ見へざる女門に清元延紫と書
し名札を掛たるハ言ずもがな清元の師匠と
おもハ思ハるれ此とき件の延紫ハひとり長火
鉢に寄り新板の中本を読居る所へ表
の格子戸をガラリと明て内へ這足端を過なる
野太い男の声 男「お師匠さん在宿か子ト言ふて延
紫ハ中本の続かけてある処をちよいと一枚読かけて
直さま中へ仕切の障子を明て 紫「ヲヤ仙さん
お這入なさいマア此頃ハさつぱりおみかぎりでおねへ
仙「十二ヶ月うら言ふ様でもねへがつまらねへ用が出来たので
ツイ此不沙汰に成りました 紫「あんまり方々へ浮気
をするからよいさ さうでもなからうがサ 仙「遠慮が
ねへ備前から一遍さんのさうでもねへのサ 紫「ヲヤお
前さんなんぞが肩を張て返をおいひだやア紫なんざアどふ

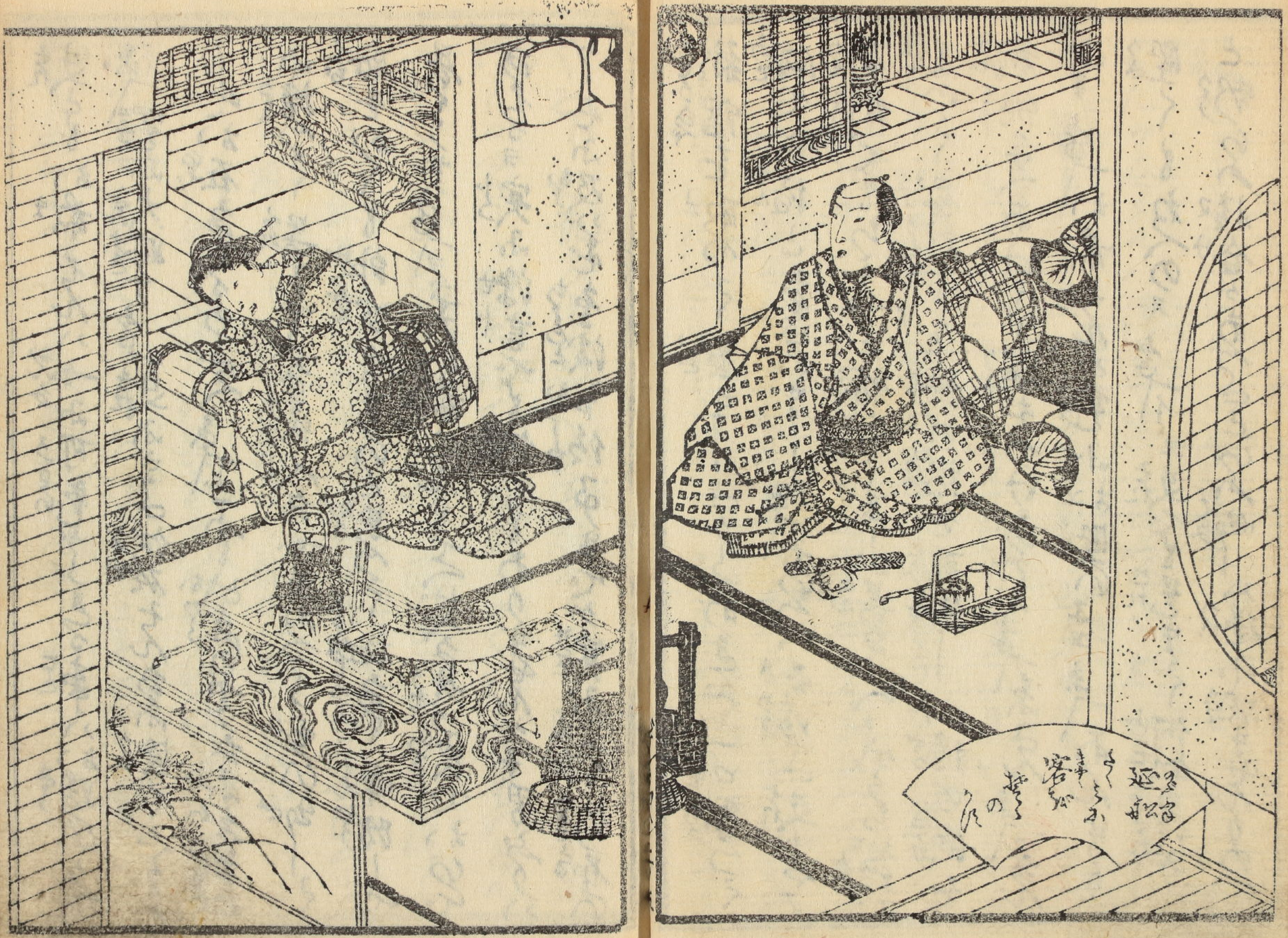
知らせやう　仙「十二ハお鍋さんハ何時も若いやア子　家「いつも
お若いと云ハるゝ中じやア家らハお仕舞サ　ホヽヽヽ　仙「ホイ
これハ大きにおそれを云ひ申した　ヽヽヽ　トキ二ハお鍋さん思召
の若旦那ハ此方じやアねへか子　家「アヽ畜生と荻野から
の名前が見えりいとらこ今朝から此頃ハ寝てお在な
さるが何ぞ用がある訳しく逢ひたか　仙「十二寝てある訳
其の用でもねへから又今度お目にかゝつた時のことさ
知らせやう　家「そうしてもマアおまへさんお揚りなさへ今

いふお茶が出来る所ござる　仙「貴方がたのさがマア余所渡
往つて来やせう　家「ヲヤおでもお帰りか夫じやア
又後刻ハお出な条さんも丁度目をお覚しなさう
から　仙「ちつと跡に寄りたい所の又寄やせうが若
来なば条さんに宜しくとしさうにしてお出
あせへト言ひ捨て表へ出る折しも傍に小荻具を
若て寝て居るサ一二の艶男名ハ京亭此相手に目を
覚しトいふ足入ゆく小荻具の中から首を出し

京「今日逢ぞ来たのか子 孫「ア 河岸の仙さんが来てお
前さんに何か用があるといふ事だから お記しもうしたが
そうかとおもつてエロナニ寝て御在なさる所へ又参りやした
でお出なさいまし 急ぎなさる間しくもうして呉れ
ろといふて彼奴が来のましたヨ 京「ハテナ 仙公が此間に
用といふは何だらうナト わしも考へたが何か思ひあたりし
様子ぢやて只宗示くと思つて居る所へ 古和もいふ
じく気付は すぐにふ何ぞお咄しは有ますまいか ござへますねへ

京「エ。ナニ住まうねへ 決サト又気付て居る 孫「どふも気で
てお在なさるから何ぞ出来ましたか 京「様子の鏡が
つまらぬや隠しても急ぎめ 実は此家の娘のお墨が
極町の家次郎と言ふ人の処へ是非縁組といふ
と家さんもまことお思を聞かずに内くわ談が極る
処やら中へ這入つて邪魔をする奴が出来て いま
探合て居る最中どうも其お墨めが仙公を
たのんで此家に帰つて始末をつけて呉ろといつて

邪しまのござらうと思ひませぬ 孝「ヲヤ夫じやアお前
さんが今度ハ濡事師であつて狂言をなさるの
ご了見じやア又狂言が面白く出来ませうかへ 夫ハ
然うと京さんへお気持ハまだ悪うござへ升か泣へ然と
むかう迎酒にお燗をつけますへ夫ませうか 京「然うサ
今一擲入ませうしまのござ文酒が呑そうになつて来て
母サ何ぞ後の起る肴を然う言つておくれ
孝「然うお作りござらうと思つて今ぞこ表町の鑑屋から
戯番を取つて盃まして一口呑つく
跡で自前と申ます 京「その方ハ奇妙こ夫じやア
面倒でもちよつと燗をしてお呉なせへトおちいお跡ハ
さうしてお肴持より戯の鑑を取出し小樽の酒を
燗徳利へあけて燗をつけながら 孝「京さん 京「エなん
ご了 孝「いまお茶さんハ宅に堅の子エ 京「あんまり
堅くもねへのさ 孝「イエ夫でも是まで何処の誰さんと
訳合があつたといふ噂ハ終に聞ませんものを



夫ともお柳さんハ女に可愛がられる事ハお嫌ひかへ
糸「実に大好サ　亀「夫じやア何故そんなに塞ぐそわ〳〵しくお在なさるのだへ　糸「どふも此身の事なる面目なさに
に捲られて是ハ茶人な女自ねへかと言ひ出して
恥をかくも外聞がわりいと思つて極真面目に辛抱して
居るノサ　亀「ヲヤアお柳さんも女げへな嘘吐でおいでな
なさるヨ実に浮言でも何でもありませんが子男ぶりハ
中も及バぬ音羽屋の似顔までが実によく役者ハ
そそして程がよろしくお在なさるからお柳さんに
何ぼうか寄しい会話でも掛られましておもひなさいどん
な女でも夫こそ真に命もいらなへ気になりますよ
糸「コレサ、亀「お糸さんハ加減の人を捨んで明日気ひかう
此身を嬉しがらせても縁より他にハ無しれへからハ
亀「ホヽヽアレ無理う嘘ばかりお呉なさいちやアいけませんへ子実
正に荒女がお柳さんの男を語ぐ　糸「さぞ悪く言つて
居るだらう　亀「アレモウ悪推なこう言つてお出な

なるヨホヽト（かうち酒のかんもできて二人が中ふさしづきのやりとりあり為べし）〽それハそうと子
糸さん私の卿へとき〴〵来る向表のお方と
いふ娘子余程可愛らしいじやアありませんか 糸〽ち
げへねへ那處ハ大きくなつてさぞかしるう 〽あ
まで形容ハかさいのうちでも十人並でありますよトサハお糸さん
いきな家ふみつて私がおせきを為ませうか 糸〽標致ハ
婦人があんまり年がいかねへぜ 〽十二あのくらゐな年から
うまく仕込ぐいおやなもの年比ふなると何様ふ面白

いろ知りませんぜ 糸〽そりやアそんな物ぐるみ人の大
事な處女を遊婦ふさせちやア先の親へ對しても
済まへ鉄ぐが 〽アレサ私がつくり先の親が望けりやア
こんな事を云やア為りませんが那處の母親といふものが
盲で毎日按摩を取つて活業ふ為て居ますはかり那
處も内へ来る客ふ姿をえへちり逢るの八人へ仕事
や洗濯をしてて暮しの傍も多く抹き稼ぎでも何
を云ふも盲と少女のそすつてうて親子ぐ喰続く

のが六ヶ敷といふのなれバ実に可憐なことでありますから
那人小浄瑠璃でも仕込んで置て母親の為に
なる事にもならうと思つて杵屋長唄んてやア稽古
をして参りましたが夫ですてもわづかの月謝ですら礼を
除けハ何も取りハ致しませんけれど差上ますのが那人の母
親が常々も私の所へ来て言ひますにハやアお前も
年頃にありましよう何卒旦那でも持たせて
私も楽がしたいものでございますと僅年のいかない娘にそん

なことをさせるのでござりますからなる事ならお前の気に入る
やうなそして実な為て下さる旦那が持たせたいと
存じて居りますが若そんな方があるならバお世話を
お願ひ申しますと早くも頼んで継ましよう
夫でハお前さんに聞かしても見ましようとノサと
差あたりに勧めて止まざりける
其名を延縄といふハ何なる若者長谷寺観
音の寺内に住居して縫箔の家業を営みを出

きびしく強慾非道に金をまうけし彼ハお栗
ハむつましくありけるがお栗が産後に悩みて打臥
残らず持出し其侭浮く貧窮せし我より年
の十才ばかりも若き男を伴ひて寺内を欠
落せし事ハ第三編に委しく見へたり又
よりしてかのお栗ハ伴の男と倶々に諸く
方々を遍歴するうち金ハ大方遣ひ捨しかハお栗ハ
基より悪婆なり男も不良者なれバ是より次

第の口舌より僅一年ほどにて男とも別れ
仕業も後見る縁町に変居ある者を求め柱
び付る殿と云ハ女主第一の事なれバ何に徴べき
活業もなく處女の時より身に習ひ覚る浄瑠璃をさ
いはひに家元へさし出し浄元延壽と名を
あらため稽古所をひらきしに親ハ鬼にひとし
けれども外貌ハ人並より見目よき方にて評判
よく成に随ひて十四五年もの頃ハ女に書せしが

正真に師道を守るのみでは余年の命を存ふまじと
ねがふ今時らしき息子様をバ自分の住居へ引
迎えとりて好みを勧めしに是も叶はず
悪念あがりし是より小万と来三郎が不思儀の
縁ありしを結びけるも発端とはなりしなり

第九回

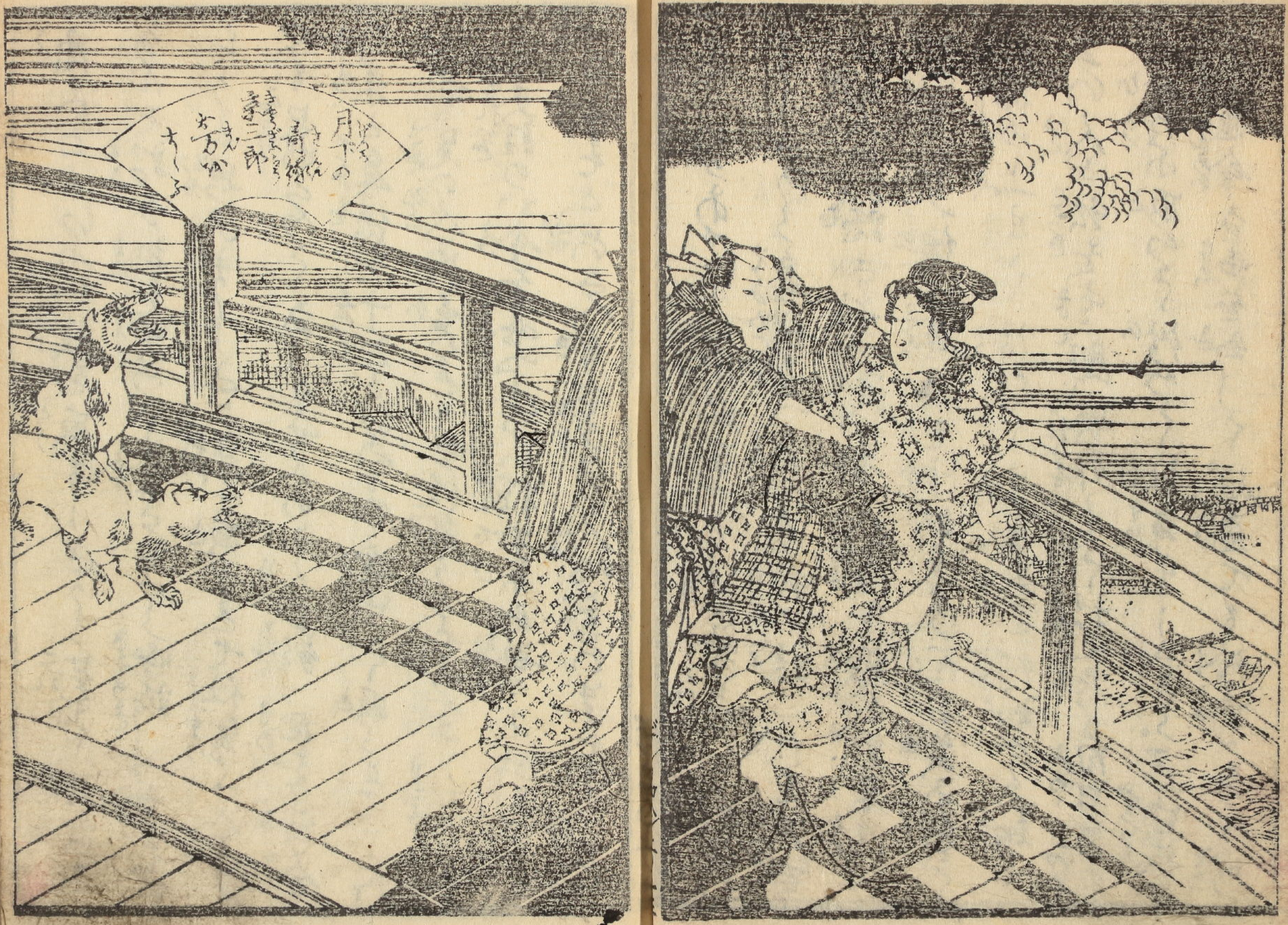
楼戸の笛や嘈々嚢々の声も途切として真夜中須来三
郎は只一個真巨橋の中程まで渡りかゝりし其折
しも年ハ十五か十六の薄曚けれバ見分ねど最艶
しき独りの少女袂を顔にあてゝ声も立
ず泣居たるを見るに不安の晴ざれバ来三郎ハ稍
寄りし後ろに佇て窺ふとも知らず、かの少女ハ夢にも知らず
ず猶泣沈みて居たりしが何思ひけん欄干に手を
と足を踏のばし身を投んとする程に来三郎ハ物も
しく「コレマア待ねト言ひかけて処女を走より抱
留まてバ娘も是に驚きて涙ながらに声をたてあげ

娘「アレ何程でもございませんが何卒此場を見遁して
放して下さいまし ト言ひつゝ振向く折こそ
あれ 雲を洩て照月に二人は顔を見合せ 粂「ヤアお
前ハ緑町の延紅さんの所へ稽古に来るお万さんじやアねへか
ト言ながら娘もひつきり方「然ういふお前さんハ悪
町と申の小間物店でございますね 粂「アイサ粂三郎だよ
そしてもお前ハマア何ゆゑ身を投やうとハなさる
のだ まつたくも死なふとまで思ひつめるは訳があらう さア

あらく六ケ敷事でもおつしやるが不承知なら金銀づく
で済むことなら随分私が何程なりと出してあげやう
やせうか マア気を落つけて一通り委細を咄してくんな
見る事へ係あんまり出過て決らうが子 娘「イヱ実に有
がたふございますけれどもどふも申上て居られぬ訳が
ございませんから私ハ先刻も覚悟をして居りましたヨ
粂「言訳があるといふのハマアどんな言の訳だ子言て聞
あらいおまへ お前へ及ばぬながら 彩りのひかりちやア

何処までもお世話を為されて下さるとやア言ふにかゝり
女房「御深切にお情けて下さいますかや
まんざら子を仔細ともの、知らぬことございませんヨ此方向ふの
老婆さんが鼻緒を縫ってそれで渡世をなさる、お鏡に成りて
と言って、これ至って精出して今日までに縫って
仕舞て、今晩は夜食を仕舞と直に鼻緒屋へ
持って行うと為ましたら、向ふの老婆さんが云ひ
ますにやア、お前鼻緒屋へお出なさる、私の分をも、お金の

来るのがあるから序に取って来て呉れろと頼まれ
ましたから鼻緒屋へ参って私の縫った代を五百
と向ふのお婆さんの所へ来る、お金を弐分弐朱受取に
翌日ッから縫ふ鼻緒を十把ばかり風呂敷に包んで
此橋の上まで帰って来ますと、何処のか知らぬ
あの人が私を其処へ突倒して持って居る風呂敷包
を無理に取って往って仕舞ましたから。アレ盗賊と
一生懸命な声を出して追駆ても路方が多く



月下の奇縁
京三郎
お万が
すくふ

貳又百といふお銭を取ましてそれが是が母公に
なんぞ好な物を買つて喰させて悦ばしてやるが
よいと思ひましてネ夫を取まで仕入させぞうり
でも口惜くてありませんのね人の預り物を不分
部来と鼻緒を十把といふもの途中で取られてしまへ
どふも先の人に云訳がありませんから死のふと思ひまして死の身
ろう夫程のお金を無くす事は此出来ぬ母アに付ふとを
吹せまするとおきやくさまのおきい人でござりませう万一

此身を捨ましても病気でも起ると悲しうご
ざいますそうして凡その子を殺て死んでしまはふが
可憐そうだと思つてあきらめても呉ませうから
どふも此まゝで住居へは帰られませんと云ひつ
又も泣出すを来三郎は彼果て暫し完爾とうち
笑ひ来「イヤ夫は実に悪ひ了簡だ其程の金でも有
ことか僅な部分非業や三分の事でむマア大事な体
を川へ沈めてしまはせへ夫こそ母アが気を揉で狂気に

なんなさるかも知れねへヨ料う言ちやア不躾
なれども私が其金を出して進るから受るぞ
縁起な事を留めへぜト言ひながら懐より金一包
を取り出し 亭「お茶の孝行な志を感ちやア冥
加もおそれ多て進ぜたけれども今夜アあのゆく道
会せがおすかいかマア是丈あげるから是で向ふの
お姥さんとやらの部分御身も継親の方を代で
済して残つたら其で母アに何ぞ甘くて喰せな

せへト言ひつゝ金をさし出せバ お万ハ見るより物り
しつゝ嬉しく思へど何とやら遠慮なる事と思ふにぞ
流石に是を受かねて 万「寔に思召ハ有難ふござい
ますけれども左様なお金を貰いてハお気の毒で
そして又お返し申ますも手が出来ませんから 亭「ナニ
是ぞうの金をそんなに言ふちやア却て此方が
気の毒だそして返すの何のとそんな心配ハいらねへ
手ごろ心労ひなつかひなせへト金を出しつゝその手を

うへに恩にも掛ぞ難有しく存し升言語に絶る斯の
嬉しく思へバ辞退もせず先其金をうけとつて只一寸
様子が些のうちハお借申しませうヨ 糸「そんな難儀なる金
でも当分ハと思へバ人情のよくねへ拙がらマア借ると思
つて居なさるがいゝ夫ハ然うと大きに欲のふけたこのふ
お茶が悔しくもで嘸母アが案じて居なさるだらうから
其金を持つて速く住なさるがいゝ備モウ彼是九ツ
にもなるのに差へ娘を此処に独りで帰しちやア

途中が気づかひだんな悪漢に出会もして難義をなめへ
とも知れねへから此男がお茶の宅のそばまで送つ
て進申ふ 万「イエ夫でハ却てお気の毒でござゐますそ
うしてハ独りで帰りますよ 糸「ナニサそんな
事に遠慮をしなさんな 万一どんなめに逢ふかしれねへ
夫を捨て置て子を此男の身にとつて不意気者と
間違られても其外聞がわりいのら知つてねへけれども
夜道をする人ハあるしやアねへか 万「アレサ

気づでハござゐませんが子ト言ひかけし男のかほを
ちよつと見んながら始めて完爾と笑ひ　万「どうぞお妻の
毒ぶしござゐますものを　京「十三さんおかに毒薬をさせる
気がねへサアく来なせへト言はれし　お万ハ何と思ふ
昔しハ他ん男と思ひし離れともなき心より義理と思ひ
ど　其まゝに京三郎に伴ひてやはり夫町近く
折しも職に懐やるもう商ひに二人ハ大きに商売し
て　京「サアく大変になつて来さ何にしろ急ぎな

せへ　縁ハお茶の位居まで此方が往つちやア間が悪る
ケアねへ　万「ハイ　十二婦アハ番頭奥の地主様の所へ按摩
に来つて九ツ過であけまバ帰りませんヨ見ますと箱に
居りますれバ程なくこざゐますにお茶さんにお思ひに
なつたかを聞いてせめてハお礼でもやりさせませう
京「イヤく母アに今夜の事を為せちやア按摩させる種
ごろうさいがわりではなして来て方が宜いかうこそで
礼の何のとそんなことハ変じやねへことだト吸うち

程なくおまんの家の門口に来りお万門の戸をさぐり
見て万「ヲヤ丁度留守でございますヨ今私が戸を
明るうち軒下へ其のまゝ濡ないやうにしてお在なさいヨ
ト言ひつゝ手速く戸をあけ明家に喜三郎を迎入れ基
のごとくに戸を締て家を留にぞありける

春色傳家之花巻之十終

春色傳家の花巻之十一

第廿一回

江戸 為永春水 著

暁の鐘にふと目を覚まし喜三郎は消残る
行燈の火影に四辺を見まはせば那処ぞ町の裏家
にてお万と添寝しゐるにぞ扨は我知らず眠りしと
心の中に驚きつゝ寝衣をそつと抜出んとするをお
万が引止て万「ヲヤ宜うお帰んなさるのでございますぞ

ゑ　京「ツイとろ／＼眠つたのが大きに遅くなつたさ
寝袮て居るうちに母アが帰らねへで宜いさ　万「ナニ
母アはあんまり降りが強いので地主さんへ上りましたさ
らう／＼までお夜が明るのでは帰りませんのさ　マアお茶さん
も夜の明るまでゝお左様なさいましな　京「どうして／＼
夜が明てから帰つて只へ近所の手前がよくねへ
ふ文代は何程か紐合をしてくれてお茶に会ふ様に
あるから待つて居ても善ねへ　ヲニタガ　今夜はとんだ目

に合つたよ今頃はさぞ口惜く思つて居るだらう　子
万「イヱ私やアモウ言ひわけしが新主の前めしてく
夜着の襟をかぶつて顔をかくしも京三郎は笑ひながら　京「へ
私やアモウ何様しでござんせんヨ　エ　万「何様ござんせんヨ
京「知らないといふのは出つぷり口惜しいのさ　子　万「イヱ
京「それぢやア嬉しいのか　万「ハイ　京「そんなら何故泣く
初はあんまりに嫌がつてのこと　万「十三嫌がりはいたしません
けれども何だか極の中が恥かしいやうでござりました

ものを　糸「嘘を吐なへ　お花ハ是まで何処にぶらく立
派な情男があるとの評判だから姉の恥しい
のと云つても埒ハあかねへ　万「アレマア　あんな可憐
そうな子を誑かすよ　私に何程してそんな子が出来
ましたもの　糸「イヤ〳〵どうもおめへハ　ト態と正まじめ
な顔で云ふ　お万ハおし涙ぐんで　万「実正にそんな
こと手ハぞんじませんものを　ト恨めしそうに糸三郎の
顔を見つめる也　糸三郎ハ愈々うたがひぶかし

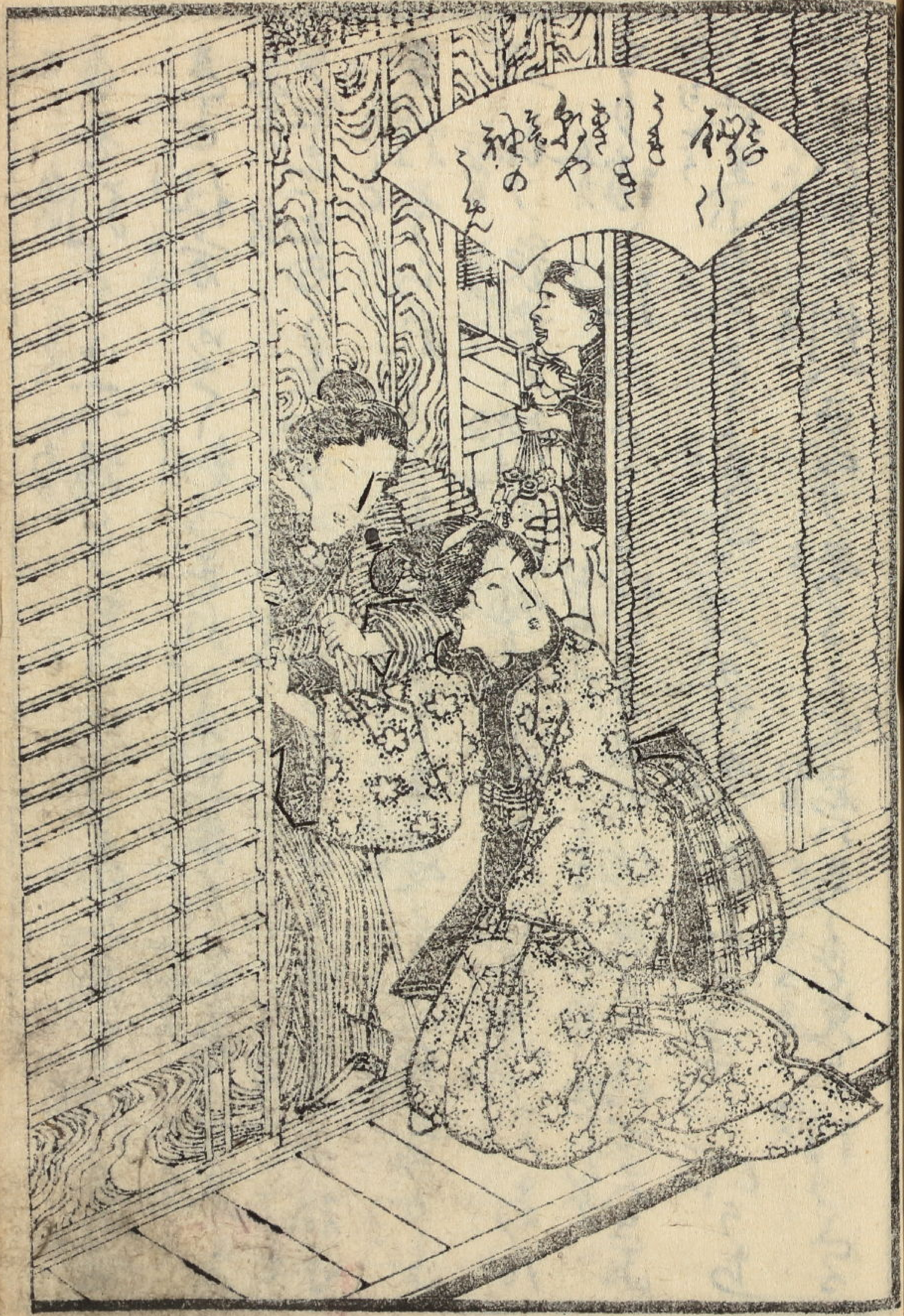
糸「ハヽヽヽコレサ戯言だよそんなに正直に請られちやア
気の毒だサア〳〵機嫌を直して完爾笑つて見
せな。ヨ。ヨ。ハ　お万さんト云つて漸く心を落付　万「ヲヤ
夫じやア私を疑つてハお呉でハござゐませんかエ　糸「
何しに疑ぐるものかな　万「アレ嬉しい　私ぎやア実正
に　お花さんが恩の子でも為して居る様にかおもつて
いらぞお存するかと　何程に気を揉ますしたらう　夫ど
けれども　お花さんハ私が今夜ぞありで跡でハ

貰ら捧つて下さいませんハ子　糸「どうして〳〵
そ可愛らしい姿を見切れにさるものか此方ア死ん
でも離れる気ハないけれども　お前ハ嘸迷惑ごらう　方「
イエ私きやアモウ些とも微に嬉しうございますよ
けれども私の身ハ若うござりも今に気儘おまさんが
客におまへさんなどを見せるごらうと思へますほどに微にモウ苦
労でなりませんヨ　糸「ナニ〳〵此方ア今もいふとほり
假令死ぬほどの事があればと言つてもどうして此躰が

捨られるものかヨ　方「そりやア真実でござりますかへ
糸「ハテ真実ござらうかな知れるのサ　方「アノアレ　糸「それ見な
お前ハ今ぞり愈だいと言ふじやアねへか　方「アレモウ恥かし
しい子エ　糸「俺ハ　方「いゝへお前さんかサ　糸「コレじやア此身
も捨つく置やうに言ひつ宜いをきかり縁が
嗚呼此二個の夫中八本の苦楽ハ知らねども今宵
ぞうり八喜見城他目に知られぬこの一夜最羨ましき
事なるべしや憾て其夜も明なれば翌日の宿く昇

まづ文様の容をもまなびし折から門へ帰り来る
お万が母の声として 母「お万や〱此処を開く
らんかコレサお万やまだ寝て居るのかノウトいふ
声に驚き二人は吃驚り 京「強ぜ来さしやアねへか 万「て
母アが帰つてのだヨ 京「そりやア大変だ何処ぞ隠れる
所はあるめへか 万「ナニ母アは目が不自由だからかくれ
るにも及びやアしませんヨ夫だから私が今門の戸を
明ますから母アが這入ると其跡で年寄お帰んな

きいましヨト言ひながら寝所を出て門口の掛
鉄をはづしながら 万「母アお帰りか私しやアツイ
寝忘てヨト言ひつゝ門の戸をおし明れバ 母「お茶之
マア何程子供だと言つて宵からよつぽど寝るすヨ私しやア
今晩お隣さまで御膳を食て行けと言ふから
此で来たハナ夫ホマア門口も明ずに寝てゐる
とハ宜いきのだノウ 万「ヲヤ然うだつけ堪忍
しておくれヨ今度から気をつけるからト言ひつゝ母の



手を引て上へ揚らせながら糸三郎に此間の咄
迄と仕方ばなしをして聞すれバ糸三郎ハ合点して率度
戸口を出ゆくをお万ハ見送るともなく母ハ格子
を推量られしと素知らぬ顔を手速く片付ながら
万「母ア夕部ハ何故お帰りがおそかつたエ　母「アノあん
まり降が強かつたから地蔵さまで雨宿して大きに
遅く成て来たヨ　万「ヲヤ夫ハ宜うござつたネエト此うち
母ハ火鉢の側へいざり寄るとて思ハず手先に障る

煙管を取て急ぎまぎらせしが不審らしき顔付
なく　母「お万や此煙管ハ何方のだへト言ひつゝお
万ハその煙管をとまではまさしく糸三郎が今まで
呑居し煙管なるが今うろたへて帰るとて忘れて
行しと思ふとバ胸にギツクリあたりしがその後程ハ
糸さんと明白にも言ひがたく親を欺すハ何とやら
不敵くとお前へ当座を何ぢやら言ひ紛らさんと
万「それハ子アノ何サア昨日参つて来たお客が忘

見とく結構のこゝヨ 母「それに為てハ此煙管の雁首に
暖まりがあるがお前今此きせるで喉でもおのきのち
万「七十二 私しやア呑ハ為ぬめへヨ 母「それでもまさに何左雁首
が暖くあつて居るのぢやトいわれてハよく圓りしう
万「十二子支ハ今お前が喉をお呑ごらうと思つて私が火
鉢の火を此煙管で温めうつ支ぐ暖くあつてゐる
のぢやヨ 母「ヲヤマアお前を知つた人さまのもぐもんな
る事を言る者があるものかネ今にも取に来るであらう時

につまらう何所ぞへ大じに仕舞て置ませう。そして
のお方や私ハ些とお前にいわくきかせる事がありやす
そこへおかけとお座りトいふに 万「お方ハ何ともいう様
ねへ足のきかぬ見すて別たる母親の側へどう
せう遠慮ふかく怖くあらう奇態が母ハ足さへ見へ
ぬ目を涙にひたで曇らせて 母「コレお方や今新造て
いふて喰もせぬ親の身で恥かしいが私ハ基大坂の
大家の内といふ所で芸子をして居たときがあつと

しこゝろさる大家の若旦那に馴染て末ハ夫婦と
ならうとまで互ひに深くなりしに其若旦那の胤を
孕しが産落し子ハお前で御座ります後に若旦那
が儲し子を付て跡目にと思ふて居たれど其家ハ大金持
でもまだ部屋住でお杢ゆゑ私の腹を請出して他へ
住居を持せやうと云かけれども叶ひませぬで
おまへを乳のある所へ里に出て私ハ此所へ奉公に出て
奉公をして居るうち或夜の事ぐ其若旦那が室

に見捨られし夜其所へ来て私に始終の事を語り此
身も見すぐ手前の所へ永く通ふてはお方ともに
子まで出来ねばならぬ家から一年も経ずに相續
をしてもらふにさせて貰やうと思ふて居るに継母
と親父の方から引ぐ此身に差つけて母子まで追出され
まうく今般済金を二拾両貰ふて勘当されて
うら地も郷中が悪くて此土地に居られず寧の子
鎌倉へ往つて一商売して見やうと思ふうち手前ハ

随分商売に精を出して云ひ分なくいろ〳〵お方を
どうぞ〳〵して育て呉ろ其内我が出世とでも取続
こう孫金へ呼よせるやうにまうと諸欲あがり嬉
かう金を十両出して置くは是ハあんまり些いけれども那
児を育てる何ぞの足しに為て呉ろと言はれた時
の私が悲しさホンニ死んでも仕廻ひはせいでやうであらうと
けれどもあんまり私が浮て居ると若旦那の家に未練
が出やうかと態と心を励まして其時拵へて十
両の金に私の髪飾を揃へて別に十両こしらへて
継合せ廿両の金を若旦那の為へ遣して私ハ彩り勤め
をしくて居てもお前ひとりハどうでも為して育てまして
安くもんなあ苦労に為てなればこそ孫金へ往く
一商売なすことなり此金をも元手として足しに為て
下さいましと無理に其金を持せて進まして私の
心ぐしを晴らしいと言ひつゝ涙をこぼしつゝお嘆きぶら
けが夫が一生の別になることハ夢が付あんざヨト

言ひつくしがたき愁歎いと長きゆゑぞ又次にわける

第廿二回

其時お万ハ過こし来方の長物語を聞くうちも驚ひ泣しづみ居たりしが万へそれじやア私のお爺さんハ上方の田舎へ往くと言つて母アに別れて切り便りもなのうへ母へて案じて目の潰れるほど苦労をしつた子それから又聞なさい主家旦那に別れ別れてくらし私ハ奉公をして丸三年といふもの今日ハ田舎から便りがあるか翌日ハ迎ひの人が来るかと待つて居るうち私の年季が明いて宿替ふなつとうち大坂に居るて家を探すより田舎へ行つて見よ私ハお目に掛り度も角もなかうと三文ふある方前をつまれて選んで此田舎へ来て細々と見且私のお行衛を尋さけれども知れずなんともうへに私が此とりの目になつたらいつ尋ね事も出来ないで長の年月苦労ばかりして居る

うちも私ハ逆もあの縁があつてお目に掛つたのでござん
しでも舅方ハあのかがせめてハお前がこんなに大きく成
人なるこのを旦那に一目おみせ申したいと朝晩様お
神仏にも只夫ばかりを願つて居るヨ私が旦那に
別れるとき後の徒楼にと言つて置いた呑んど
巾着口を二ツに割つて壱両ハ旦那に進ぜて一両ハ
私がいまだに肌身をはなさず持て居るのだと是を
お前の守袋へ入れてあげて仮令私が死んだあと

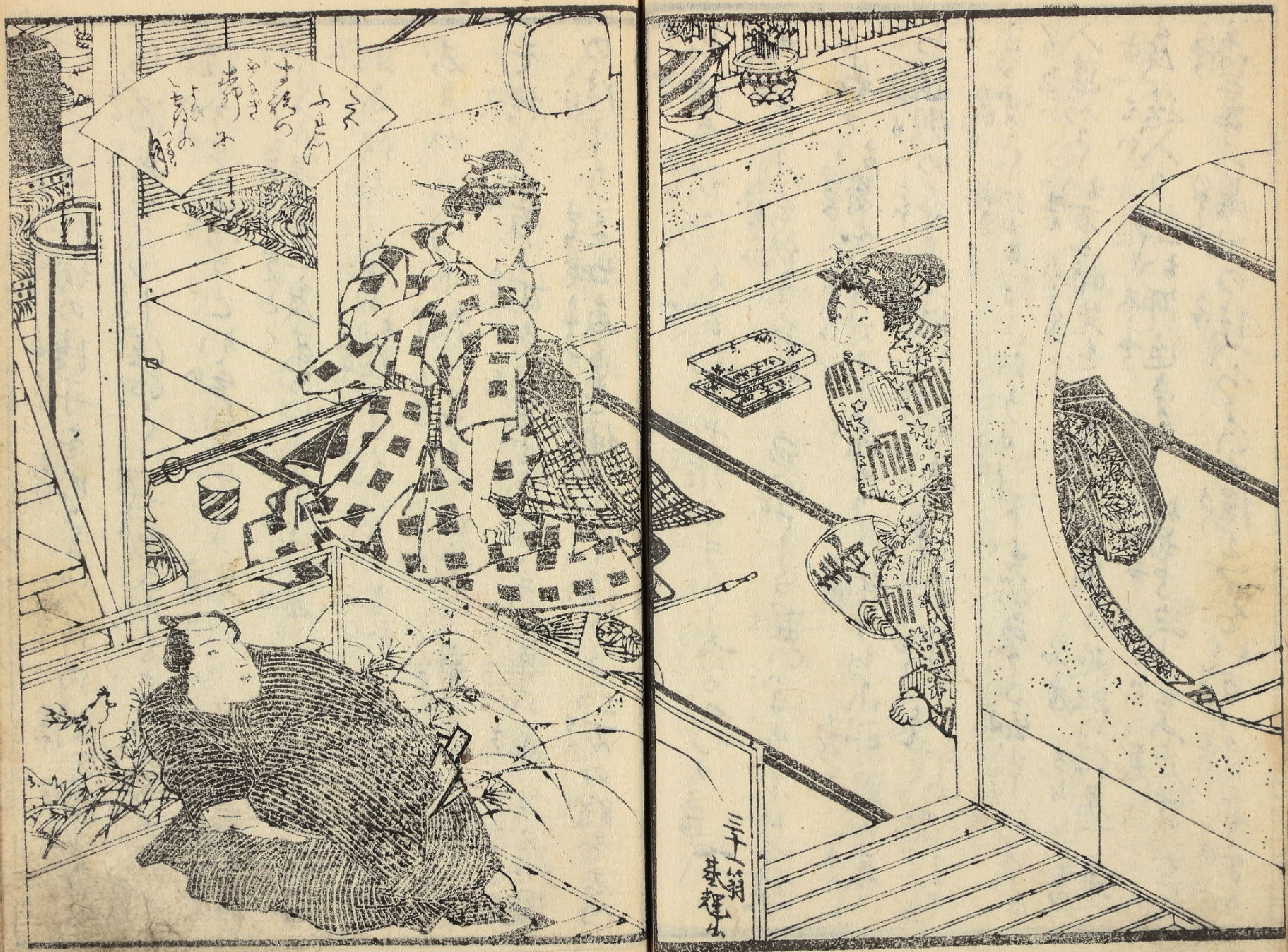
でも旦那に田舎で私の苦労をしたことをお咄し
ものしく呉々ヨ遊ばしても出方やお前ハ様が何と
言つても人の世話なんぞになんなさんなヨ何程貧乏
をしてもお前に旦那をおもはせてハ今までく私が
苦労をした甲斐も甲斐ハあるヨ是とも此お前が嫁と
人があつて此男かある末始終夫婦になるならおまへ
逃んだあとで悪気なしに私にいひなどうでもしく
添つてゐる始めして進るうと必ず浮気らしいことを

をなしく人に彼是云はるゝ様な事をしてくれるなさ
んなヨト云つゝもお方ハ母親の慈悲な言語を聞に
情けりよど胸に迫りけるが旦那を持る身なり其の
男があるからば添ふもまくきやろと云つゝも昨夜の様
子を知つくゝと思へバ何様やら恥かしくさし俯
向てぞ居たりける
「隅田川四季のながめの初出に出
方様な姿さらす猪とや言やらしや暴を嘆く

川風に眠りさますも中夏の紅毛 七
寝ぶと二夜の月
ト中暮ゆかし傾城あがらし近紅が格に寄りかゝりくく
思ひ節のゆかしく三弦の爪弾をしく居る所へ表の格子戸
を明く　京「ハイ御きん　絹ぎぬの音のトいひながら内へ来る
京「ヨヤ来んねとぐ　お前　何ぞ　京「ヨヤ君旦那之紅
きやア宅に誰しるゝあるめうか　京「重紅ぐ
爪弾の子何時迄でもどうも烟脚子声ござぞ　京「ヨヤ又

嬉しがらせをしてハお皆様が見せるのう〜京〈遅〈
ね〜トキ二ツお松さん何ぞ巻物そうな物を書入付て居り
て居る〜孝〈何のかのおまへもう五京〈なんでもいやアな
孝〈それぢやア鐘と包子と年忌ニでもおまへもう京〈
何気なく孝〈ちがいますものゝ一ツ芸にまいでます、生茶さん
ハ全に素直の手エ筆が好ける方様の手を申渡おいれ
あゝもう今に是が明日に逢ふ入まで、お仕舞あそばせ
亭主京〈十二代目アそんなことハあゝいふのさけれども実に〳〵

しぎ思案なす語ぐハめくお茶のお世話にお子がすかせ孝〈アレ
そんなお云訣をなさるなんでも宜い八子ハモウドレ其
じやアお客を云付て来るから其うちに那れが来
ら通例の番より二階へ。子いつも京〈承知く孝〈あア。モア
己が喰て見ますからあとトきひあがつて出よ行くと
入遠ひてお万が跡先を見まハしあがつて延紀の住居へ卒
度這入り万〈ハお師匠さん。おや、お前ハ下女の声呼ハいさ
京三郎ハ屏風の陰へちよいと隠るをお方ハ見其を京が


三十一翁

つらぞ中仕切の障子を明て火鉢の側へ居りながら
ら溜息をホット泣つゝ　万「京さんもモヘけへざア那
程今日ハ来るといふてゐざりし先刻ッから往居を外
しもし是で三度来るのにまだお出がないあのぞうぜヨ何
か外に何ぞしてお在ぞる人の事を知らぬものでもなく
思ふとヒヨット悋気を以ひあがつて鬱ぎ宿て猫の下
を撫て居る所を見すまして京三郎ハ半双屏風
の陰より立出て手を伸して後ろからお万の眼を塞ぐ

うり押つるとお万ハ吃驚して　万「アレヱ〃ト言ひながら
男の手を振拂ひ後ろを振向て京三郎と顔見合
せ　万「ヲヤ京さんか憎らしい私ハまア誰さんかと知ら
ぞどんなに吃驚しましたらうアヽ怖かつたト言つゝ
初て寛永男ハ　京「夫じやア他の浮気男だと思て嬉し
ろさ顔が顔を見て此方ぞろさうで其処で嬉しいか
のう　万「アレまアそんな事を言つてまたやだヨ私ハ
そんな浮気男なんぞが何処にあるらうサア夫を聞ます

トせきかし御ぞんじの京〽ハまゝ何もぞんじの不便さに
なんで彼を見るのもねへハさ万〽それだからお前さん
もあんまり思込過るのじやアないかえ私ヤアお前
さんの御身が逢れから実に家を持で居るゞ三度と
此方の住居を抜出して来なんだがありますヨそん
なに思つて居るものを今さら可哀さうだと思ふて
お世辞いふてましヨト実情あらはして娘気に思ひ愁ける
京三郎ハ須臾更に居たりける

是より後六日程もなくお万が母ハ風邪の心地
とて打ふせしが次第〱に重くなりて
終にむなしくなりしかバお万が愁傷限りなく
殊に知己もあらざれバ諸事京三郎のせわにて
ゆく野辺の送りも為し果しがお万ハ独の身となり
あれバ是よりお万を我家に引取り京三郎に
離れし夫の無念を云ひふくめ其身の本懐
京三郎ハ夜あけて娘を連て田舎へ

いたりし當時ハ彼ハ慾心増長して於万
を婦佐川の娼妓とせしより名を小万と
改めしが又此おりハ婦佐川より玉川の名
一旦経しとあり又お万が母が後の證拠とて
譲りし猪口の円割ゆゑ親子の名告を
するや否ハ卅八又編にいたりて委しくするべし

春色傳家の花巻之十一了

春色傳家の花巻之十二

江戸　為永春水著

第廿三回

扨も畠山の老臣役目重兼八兵女岩波と乞を
合せ君臣の心をも助に家名をつけ捨腹を切らするる
さみく八鉄を道掃ひ又大殿八多病也へ是をも世
理に押込めて畠山の家督を押領なさんと専ら
しく種々紋柄居さし不日外重兼と岩波が互に

悪事の相談せしをお千代ハ立聞なして
事を書したゝめ清之助に報知しより忽地に
顕れかの忠義が悪計に水の泡となりしかバさてや
憎しと思ふにぞ彼主が若殿をはじめ忠義
の奴等切害し倫よくて家来を我手に入るゝか
余もあくバ切死せんと悍強して悪事に荷擔せし
味方の者を呼ひ集め不意に起つて若殿の閨へ
切入らんぞおもひけるに是をバかの清之助を初

やう〳〵近習の武士も女中等も驚天せぼとかふ
者なく上を下へとうへせしが何れも若殿を
一旦落しまゐらせば後日の危ふしと後を
近習に防禦せさせおちよ清之助ハ弥生を助に
従ひ裏門より落行くぞ折しも秋の
初めなく廿日頃のことなれバ文目も判ぬ宵闇の
路を求めて走りながら「清モシ若さま思ひがけない
今宵の騒動もよみ忠義が倣ふるとぞんじ

侍し御近習の武士にものしつけて置ましたれバ
みどもく悪義者じや悪人どもハとうに召捕ますまでも
ござりませう。どうものそのものゝ若君を此好状の御上屋
敷へ御供いたしましてハ表立ましては大阪さまへの聞
も宜しくござりませんから今晩ハ深川からおふねで
そうろふお屋敷の宿の出場の別荘へハお供をいたします
でござりませう　孫七「ヲヽ其方のものを取ハ至極道
理じやが悪義ども仁に紋を奪ハれ逆鱗をたてる

極悪孫七助と思ふかサア清く御供いたせうかへ
しまく悪義めを君が自ら召捕るなら　清「イヱ
それハ思ひ違ひでござりますそのしも御近習の武
士が悪義にお紋を奪ひとられまする極悪手へいへ
ませぬ若君をお連れ申ますにハ方々一味相知でござ
あつてハ勝ませんからの事でござりますマア〳〵私も
お殿様世極悪けしませう。コレお千代御自然御機嫌を取る
きいのどお嬢さんハお側にハ居ないのちよ「ホンニおいでる

きんハト言ひかけて晴雲を見まもりゐたりしが ちよ「
ヲヤ今まで私と同じ様に若き女のお側に附まして
ありましたが跡「十二」お喜が見へあのところ ちよ「ハイ 清「ハイ
ですあの今お喜さんが見へあのどやアたへんご変じやア
おれ此身ハお喜さんを尋ねて来るうち手前ハ御側の私
せど宿から出も遠く若き女を戦場の別荘へお供を
するがゆゑ若君も只今お波様がそとよりでござゐます
そちらハ千代をお連様してお先へ入つてゐまし

私ハお喜を尋ね出しまして直にお跡から連まして
まゐりますハト言ひつゝ二個を落しまゐり清之助ハ
て返しくお喜が行衛を気を付る折からに お喜ハ不敵
之助に附添つゝお千代清之助と倶々に後門より
しつゝ走り出しがおもひがけなき騒動にて持病の
癪のさし込てウントばかりに倒れしを盗んで立去し
お千代ハ晴雲あればこそつゞいてお喜ハ声をたて
く那人々を呼びけれど苦痛に声も立ざれバ

彼何やせんと手を揉のみ詮方もなく手打して其折
誰とハ知らねど手拭にて頬冠りせし一個の男
門陰よりしづ／＼とお妻の側へ摺寄り抜身を星の光
に透し見て　男「コレ／＼婆さん按摩でも何いの
かト言れてお妻ハ恟りせしがよき幸いとおまめ
なぞ表ふ細き声をあげ　妻「ハイ近頃ぞんじ
ませんが御深切にお頼ミ申ますお言葉にお頼
へお願ひがござりますが私ハ持病の癪がおこりまして

一足も歩かれませんから何卒先へ参つて連に此
事をお知らせなされて下さいまし　男「ヤそれを
しらずに子供をお前を連れ遠路へ出て不自由な
でも出会と大変じやから此身が介抱して連の人の
居なさる所まで連て行てやらうとお言ふが
素より無理に介抱すると横道へ十町ばかりも
走りて後先見まはし溜息をホット吻つくお妻に
對ひ　男「コウ婆さん返事で連の人ハ

追付かんと言ひて上り行が近寄らうとせしく
「お茶の行先ハ何処ぞ子　ある「ハイ書院の番場くまで
ござります　男「イヤそりやア大変ご遠方じや番場ま
でハ三里の余もありますうへ今夜のうちに
送られて行くにハおよびませぬ又金程時刻がありますれば
又ると連の人ありが今夜ハ此所の
住居が此を頼どうも一晩泊りて夜の明るのを待ちて
番場へ送り届けて進ぜやせうト云ひければ　ある「へ　おきいハ

当惑せしが他に致方もあらざれバ　ある「それじやア
お言葉の毒でござりませうぞ今晩ハお茶さん
の所へお止め申したらよいさ　男「ヨシ／＼お茶が
然らバ家を落付て居れバ夜の明次第番場へ送りて
進ぜやせうト言ひながら又々六町行かぬに一軒の
何しる最も焼しき一ツ家あり伴の男ハおいきをバ此家の
内へ伴ひ入り火鉢の埋炭を掘起し行燈に灯を
ともしけるときおいきハ初めて彼男の顔をつく／″＼

又主ハ年ハ三十又六なれんが面髭長く生やし目
玉大きく色黒き荒男なるのみならず筋肉の様子
も何となく薄気味わるく思はれバ、お妻ハ片隅に
身をよせて、おそる／＼なんとなく居るを男ハ見
つけひなから 男「コウ女房さんそんなに遠慮をし
て居る事ハねへ、家の内ハ己れより他に誰も遠慮
な人ハ居ねへから足でも投出してゆるりとなさせへ
ホンニ今夜ハ春さきのよふに生暖かで、酒がある

酒ハお前も一口呑んで見ねへとうきうき言ふがいふト
のひながら、棚の隅より煙草入を取出し煙の尻
を火鉢の中へさし込み、炭の火をつけながら
お妻の顔をちらりと見て 男「ヤレ／＼二女房さん先
刻ハ暗いのでお前の顔がよく見へなんだが明るい
所でみると金屋の人形のやうだ、何でもお前が今夜
逢ひたいと言ふ人ハ情男だらう 男「イエ／＼そんなものでハ
ございません 男「コレサ、惚れた男に逢ふ事があるならば先

此方が案じる所じやア情男と一所に住居をせ
落をした所が途中で離散したら何といふ詫だ
らう。ヘン畜生め嘘くさるなト云ひながらお妻の傍の
お乃をちよいと蹴てやへお妻ハびツくりして又
ふるへ出す男「アレ何もそんなに怖がる事もねへ
サアく酒の燗が出来たら肴ハ後散をして呉な
もしくそんなに案じて居ずとお客の相手をして居
ねへでも宜い此方の女房に茶も一盃呑ねへト云

まてくお妻ハ怖くながら那徳久利を身を放つて
一ツ銘ぐ逃んとするその手をとらへて引よせながら
男「コレサそんなにおどくしなさるなハねへかアレサ
思ひ込んだ事をなしまつちやア居るでござりやすヨ男「ナニ悪い
事をするんじやアねへお茶がいつぱい呑てへく
居るから安心しなサ此方の側へ寄つて
呉ても悍な事めへじやアねへか。サア姉さん旦那
後此方の呑みかけを半分をけて呉ねへ女「イヱ私

しやアお酒ハ嫌ひでござります 男「きらひでも一口ぐら
ゐハ呑ねへ事があるものか夫とも此茶碗で呑むのが
否なら此身が口移しに呑せて遣らうト云ひつゝ
無理に引よせられお喜ハ口惜く腹立しく命までも
女子の甲斐なさに又詮術もなかりけり

第九十四回

當下件の荒男ハ否がるお喜を抱すくめて髭づらげ
な顔をお喜の顔へ摺付る振に羽がら 男「コウ お喜
嫌さん酒が否なら否にしなく呑せずもよしめへが
お前も情男の後を慕つて来るくらゐだから
まんざら情のねへ身もあるめへが此四又町の店を潰
負せて乳に一晩ぐらゐハ抱まで寝てもよいじやア
ねへか些ト私しやアそんな女ハぞんじません何卒堪
忍して後を放して下さいまし 男「エヽ又ハぞ部らねへ
夫じやア来遍女が熟が突ちやア從恨へられ抜へトいよく
手込に仕んとする此時お喜ハ一生懸命の力を出して振り

放し遊んとするを抱とめて傍らにも女子の甲
斐なき男の力に及ばずバアレヨ〳〵と叫べども這所ハ
野中の一ツ家にて隣といふもあらざれバ漸々寝付る
者もなく既にお喜八荒男の手込めにされんとする
所へ門の戸ガラリと押明て這入るひとりの女
年ハ五十を越へたれども甚好に粧て居るゆへに
見るめハ四十ばかりと見ゆるが矢庭に男の後ろより
襟髪掴んで引作し眼を逆だて声あららげて

女房「ヱヽ此野郎が初老年をして居ながら小娘を
引摺込んでいけふざけくさつて女房の顔を踏付に
するも程があつたものだアト大きな声にてわめき
ちらし男もおとなしく大声にて 男「此婦女アいろ
と思つてあんまり利た風な口をきくない手前の様な
婆アなんざア縦てもかまはねへ何処へでも出て行きやアがれ
女房「ヘン出て行けもよく出来たア手前が働きがねへから
年中女房の稼ぎをうちやつて居ながら大そうな口を

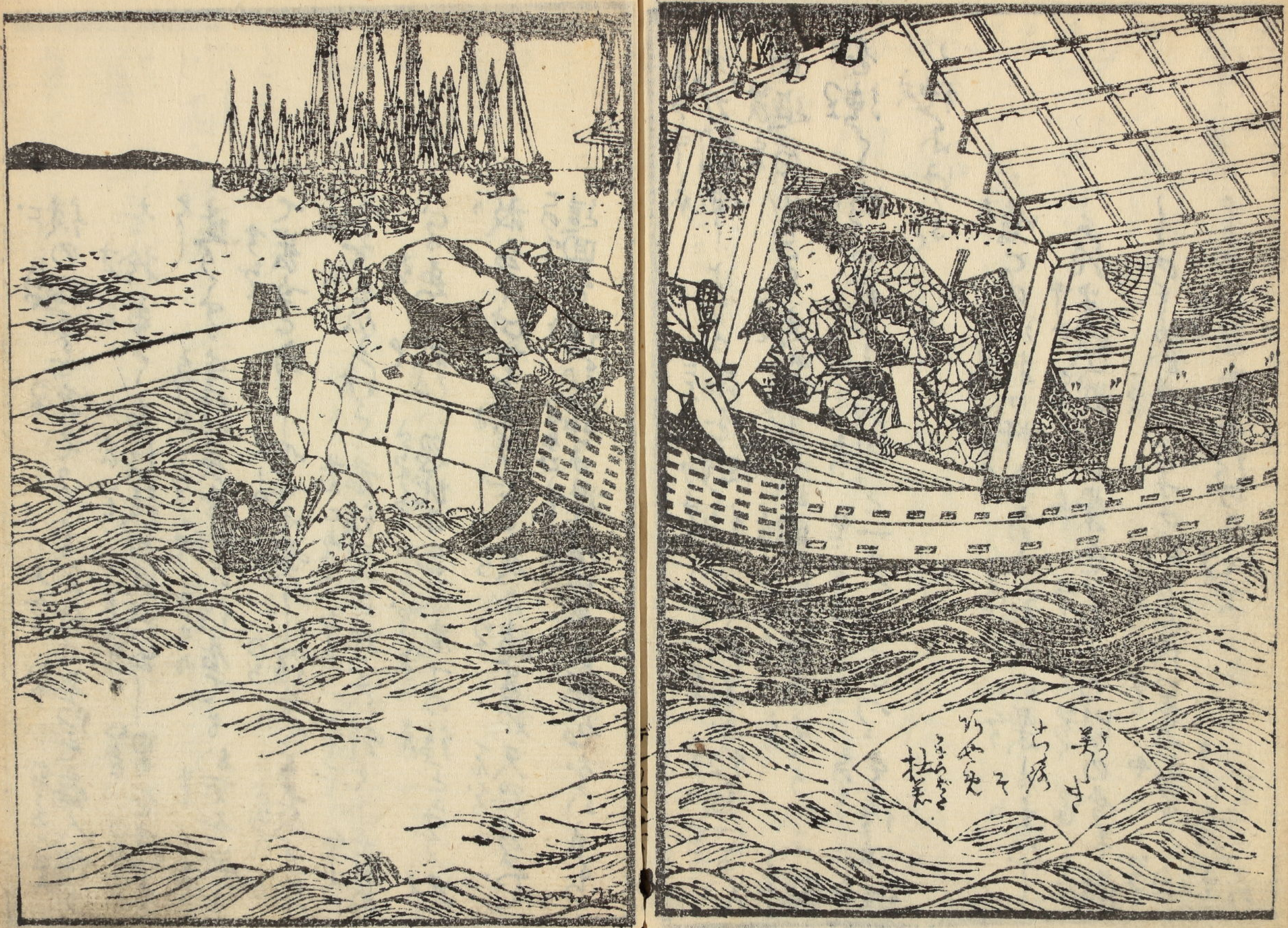
ゆきやアがるな此身が葺屋町に居て清元延寿と
いふ時分にや此身ア随分小金も溜て居たのをさん
ざん揚銭に入揚て仕舞ひ、それから方々を欺して唄
や女に養つた身の代までも此身に貢がれて揚句の
果にハとんだ田舎へ引込んで、のたくさ此身が働きが
ねへからだア此身ア年を取つて居ればこそ手前の稼ぎ
で甚悪をして連添つて居る女の気
で小娘に若がれて居くよ。ヘンあんまり馬鹿らしい

やア此妻ア此身が連て往て今に始ぬ事じやアねへか
ら、ねへ此身に恥をつけやアがつてなまいきなことをいひ
お妻の手を取つて連出さんとする時、かの荒男ハ
腹に思ふ事のありけんと見える此鉢が髪を手にかつて
ミ所の辺に有合ふ出刃庖丁を取るより早く
肩先を四五寸ばかり切下げる其つゞきに
返して其睛母になりしかバ、お妻ハ悲しきおそる
しき事にありしが居ありしが庵の端の所へお

舩ヶ崎へ来る君様に手前を犯さんと思ひハ只見の
あらや今行燈の消しより此方に逃げんと心待詫く
戸口へ這ひ出る行燈を手と突かども案すに手きれく
逃ゆくを男八月迄く逃し　ヲヽ男ヤア肝心の
婦女を逃しては大変と言ひつゝ灯を逃る
籠にて行んと為る男の足へ舩ハ走りかゝり
つきあたるを荒男ハ両作と言ひかゝる
庖丁逃とは不意に背中よりして乳の下迄二三

太刀刺通しよろめく所を蹴倒しくい舩が銘を一さん
小逃出んとて走るをぞ舩ハ深疵の手をもつて髻
を強く掴られし只は件と一声叫びつゝ息を呼吸
ハ絶にける

噫このお舩が奸悪なる初めハお粟と言ひし
と若きひのお粟を若しめ騒の金を
しのもろお粟が子のおむつをバ里に遣ると偽り
黒く窓四郎をたのみ捨子となし又お粟が産



後の悩をも露ばかりも不便と思はず無慙にも独り
を捨置て家財残らず持出し男を連て
走りける夫より宇都宮の町に住居してもお万を欺き
て芸女となし唄女に売し後までも楽しく過
しけるが前後二人の婬婦は様々に苦しみ
ける悪の報ひは忽地に出刃庖丁の錆となりて果
敢なく此世を去りしも実に遁れぬ天罰なるべし
此手ぶりを遠む婿子遠く彼らが悪き心をもち

かくて名を流水が例の異見を披露めりし
其の後お吉は此中なる外の一ッ家を退出しが弟
なる所なる小屋の主を頼まれば行べき所を
知らねども夫の一生懸命と恋なる死所を求め往
と息をも吻ず走るに凡七十町ばかりにて出
川宿の程近き波打際に来りし時後より追
来る件の男ヤイヤイト呼びかけ駆て来る
あるやうなればお吉は再び驚きまして懼けれど思ふ

ふぞ揃へられたる生酔をきさんより八一トつりひかれ
死んで探を立切りバ若旅跡ずくに助るものも不便と
思ひし目出まんと果敢なきこそなのを見て稍海琢
不意り寄り足を躍らせて白波の中へざんぶと飛
入しが折しも汐のさし口のはげしき波に流され
て影さへ見ざりけれどもかの荒男ハ是を見て
怪然と憫むのも頃更茫然として居たりけり
去りとッ夏の末さ個の西を木川へと突切つて出る
ふきける

家根舟ハ客を送りし戻りと見へて内の嗅女
が只一個四ッ小折りし鼻紙出して猪のあたりなかへ寝
ぐら〽小万「兵どん 宿ゟ何時だ 兵「さうサ 子
廿八日のお月さまが余程あたつてこう彼是八ツ時であり
やせう此堤根じやア望日の六ッ時にハ人が出るど
らう〽小「ホンニ望の晩ハ廿六夜どうけねへ私も拝みたいが
頼りにしんで居るのがきまつたり舟も上て居るヨ 兵〽
トキニ今夜のお客ハ大そうおまかなよしい子 小〽

ア寔に困るじやアないか子エ那ハお客の座敷といふと
何時でも動うごョそしさ兎角送りの付息するやうな
いョまそれ女房さんや鉢八さんハ途中で逃て仕
舞てとうとう私ひとりにされさア子動うならねへとお客の
気の利く振ごげましとも今夜のお客なんぞア生利で
人の気にさわる振なさだつり言つて居るうへに
是ア酒のうへがわるいときて居るうへ座敷が済む
までハどんなに気をもんでうら和歌町らの判渡ぶらう

始末なしに出る振なものなんぞ欲得づくで出られる
ものならお客じやアないョ毎へそりやア何様して気きさん
と同様にお楽しみのやうな面白へお座敷ハわちきの只
小式ヤ毎どんも大概ごョ事さんと今夜のお客と一口に
いふ事をするものゝ子。ダカ子思つてみると嗔女荒程つまら
ないものハねへョ私ハ酒で済んでもお客と遊んで居るうちハ心
配が絶ないもの済しいかとも何とも思やアしないョ備
ハお客を首尾よく帰してホツと息をつくときじめて

もぶしの風が身に當る梢に包ませ髪を乱して居れ
るゝお客ハもてなしヨ 舟「そりやア実に遠ねへ事より何
卒唄女郎や船頭に思入事をさせてそして祝儀の外
お客の多分あれバいゝハし 小「ホゝ あんまり出かいねへ
舟「それハいゝが脇へ何か引掛つてそれでさへおり船が動か
ねへまこと又土左衛門じやアねへか知らん 小「アレ気味のわるい
ト此うち船頭ハ月の明りによく〳〵見て 舟「ヤア〳〵是
ハ娘の死骸だアとどろ身投だなま死だ事もねへ

と見へる 小「ナニ娘だとへ可哀さうに何卒たすけるなら
様ハあるまいかチヱ 舟「ハイよし合点へ手繰寄せて掛
合ふてもあると不怪やせん 小「それでも私さへ昨夜の
夢見とゐひ何だか胸騒ぎがしてならねへから万一掛り
合ふであれバ私が一個だと諦めてハゝ未来の迷惑ハ為るまし
から何卒面倒でも引揚てお呉な重ねて骨折賃丈
のあるハ私がもつから 舟「ナニそんなお礼ハ入りやせんがどうぞ
いつそ堤にたてれバいゝがト言ひながらいろ〳〵ふ

しく〳〵娘の乱髪を結ひ揚あちこちさがさ
アイさ小万さんお飯ゟあがへまで暖がありア
世帯小へヨヤ、然うえうましいヌエトいひつゝ二人ハ
種々に處女を取扱ひけける

春色傳家の花巻之十二了

作者　爲永春水編
画工　歌川貞重筆

揚太真遺傳
處女香
精製桐の箱入　一廻り

そも〳〵此薬ハ宇内無類の妙方にて男女ニ限らず顔の艶をよくし
して生れつき黒き顔も色白くし肌理細かにする妙能あり
且此薬ハ世間に多く有る白粉洗粉化粧水などの油薬ならで秘密にして
顔をよく肌の艶にするもの也それ故に此の薬にて顔の書付の
出来物疵あとや痣にても久しからずして消失る事妙なり
半分もつかはぬ内に其効あらはれて奇妙なり
ずいぶん安くして其功多き事は一度用ひて知り給へ
用ひ給ふ御方は忽ち此功能の顕るゝ事を見て一廻り用ひたまへかし

賣弘所

色白[illegible]梅のごとくなり二度目ひ[illegible]何程か荒れ肌の肌目も
細二重[illegible]のごとく手[illegible]とするのとはし。[illegible]。[illegible]。[illegible]
の[illegible]。[illegible]のおしも[illegible]すく[illegible]くするを待[illegible]。[illegible]て[illegible]
洗ひその[illegible]白粉と付る[illegible]
白粉[illegible]の白くうるはし[illegible]不及年[illegible]
用ひて[illegible]にも[illegible]して美くする[illegible]経ひすく[illegible]
真の美人となりぬべし

萬永春水精劑

髪の毛を延し
髪油ぞさる
妙薬 初みどり

[illegible]髪を[illegible]
[illegible]
[illegible]の有

書物并繪入讀本所
江戸京橋弥左エ門町東側中程
文永堂 大嶋屋傳右衛門